

【4】遊学年齢

[0] 本項では、何歳に生国から離れて他国に遊学したという記事を調査し、統計的に分析を施した後、若干の考察を加える。

[1] 資料を紹介する。

[1-1] まず原始仏教聖典（A文献）の遊学年齢記事がある資料を紹介する。コーサラ国王・波斯匿の王子とされる瑠璃（Viḍūḍabha）に関する記事のみである。

〈1〉瑠璃/男/王子/8歳

『増一阿含』034-002（大正02 p.690中）：然流離太子年向八歳。王告之曰。汝今已大。可詣迦毘羅衛學諸射術《就学/遊学》。是時波斯匿王給諸使人使乘大象。往詣釋種家至摩呵男舍。語摩呵男言。波斯匿王使我至此學諸射術。唯願祖父母事教授。時摩呵男報曰欲學術者善可習之。是時摩呵男。釋種集五百童子使共學術。『五分律』「衣法」（大正22 p.141上）：〔琉璃〕至年八歳王欲教學。作是念。諸藝之中射爲最勝。閻浮提界唯有釋種。佛爲菩薩時射一由旬又一拘樓舍。釋摩南射一由旬。最下手者不減一拘樓舍。當令吾子就外氏學《就学/遊学》。

[1-2] 後期原始仏教聖典（B文献）の遊学年齢記事がある資料を紹介する。1件を除くほとんどすべてがジャータカの記事であり、そのすべてが16歳で、学芸（sippa）を学ぶために、タッカシラーに遊学したとするから、パターン化しているといつてよいであろう。

〈1〉ブラフマダッタ・クマーラ（Brahmadattakumāra）（菩薩）/男/クシャトリヤ（王子）/16歳

① 16歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《副王》

Jātaka 050 Dummedha-j. (vol. I p.259) : 菩薩が16歳 (soḷasavassa) になった時、タッカシラーで学芸 (sippa) を学び《遊学》、3ヴェーダに精通し、18種の弓術を (aṭṭhārasannaṃ vijjaṭṭhānāṃ) 完全に習得した《学業の修了》。父は彼に副王位 (oparajja) を授けた《副王位》。

〈2〉パンチャーヴダ・クマーラ (Pañcāvudhakumāra) (菩薩) /男/クシャトリヤ (王子) /16歳

① 16歳《遊学》⇒②《学業の修了》

Jātaka 055 Pañcāvudha-j. (vol. I p.272) : パンチャーヴダ・クマーラ〔主分〕菩薩はブラフマダッタ王の妃の胎に生まれ、だんだん分別のつく年齢になって (viññūtā)、16歳 (soḷasavassa) になった時、父王は菩薩にタッカシラーの有名な師匠のもとで学芸 (sippa) を修するようにと告げ、師匠の謝礼の千金を持たせて送りだした《遊学》。学芸を習い終えると師匠から授けられた5種の武器をもって帰路についた《学業の修了》。

〈3〉ある男子/男/バラモン (māṇava) /16歳

① 16歳《遊学》(⇒②学業の修了⇒③《結婚》)

Jātaka 061 Asātamanta-j. (vol. I p.285) : 〔主分〕ある婆羅門族の1人の男子が16歳 (soḷasavassa) になった時、両親は息子に2つの進路の選択を問うた。「梵

天界に行きたければ、生まれた時から絶やしていない火をもって森林に入り、火神を供養しなさい《隠棲関連》。家庭に住みたければ、タッカシラーで有名な師匠（菩薩）について学芸を修し、その後に家を治めなさい⁽¹⁾」……青年バラモンは師匠への謝礼として千金を持ってタッカシラーへ行った《遊学》。……菩薩は青年の母親の意図をくみ、120歳（*viṣaṃvassasatika*）になる自身の母親を教材にして、女というものが淫らで卑しいものであることを教えて、出家を促した。この日、菩薩の母親は120歳で亡くなった。

(1) 両親の価値観としては、16歳でこのまま林住期に入るか、もし家庭生活を営む（*agāraṃ āvasitukāmo*）家住期に入るとしても、順序としては、遊学して学業が修了した後ということを行っているのであろう。16歳で林住期に入ったとする *Jātaka* の資料は他に *Jātaka 144* (vol. I p.496)、*Jātaka 162* (vol. II p.043)、*Jātaka 498* (vol. IV p.390) がある。「年齢記事一覧 [I]」（モノグラフ1号 p.201）参照。

〈4〉 ブラフマダッタ・クマーラ（*Brahmadattakumāra*）（菩薩）/男/クシャトリヤ（王子）/16歳

① 16歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③（父王の死後）《即位》

Jātaka 151 Rājovāda-j. (vol. II p.001) : ブラフマダッタ王子〔主分〕菩薩はブラフマダッタ王の第1妃の胎に生まれ、ブラフマダッタ王子と名づけられた。彼は次第に成年に達して（*vayappatta*）、16歳（*soḷasavassa*）になった時、タッカシラーへ行ってあらゆる学芸の奥義を極め（*sabbasippesu nipphattim patvā*）《遊学/学業の修了》、父王の死によって王位に即き《即位》、正しく国を治めた。

〈5〉 菩薩/男/バラモン（司祭官 *purohita* の息子）/16歳

① 16歳《遊学》⇒② 16歳（1日後）《学業の修了》

Jātaka 163 Susīma-j. (vol. II p.046) : 〔主分〕菩薩は王の象の祝祭の執行官（*hatthimaṅgalakāraka*）である司祭官の夫人の胎に生まれた。16歳（*soḷasavassa*）の時、父が死に、他の婆羅門は象の祝祭を行なうことの利益を得ようとした。彼らは菩薩がまだ若く3ヴェーダも象の経文も知らないから自分たちに行わせるようにと王に進言した。菩薩はただ1日のうちにタッカシラーへ行って、一夜でこれらを習い、翌日には帰ってきた《遊学/学業の修了》。

〈6〉 アサディサ・クマーラ（*Asadisakumāra*）（菩薩）/男/クシャトリヤ（王子）/16歳

① 16歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③（父王の死後）《即位関連》

Jātaka 181 Asadisa-j. (vol. II p.087) : 〔主分〕菩薩はブラフマダッタ王の妃の胎に生まれ、アサディサ王子と名づけられた。16歳（*soḷasavassa*）の時に菩薩はタッカシラーへ行って有名な師匠について、3ヴェーダと18種の学芸（*aṭṭhālasa sippāni*）を修了し《遊学/学業の修了》、弓術（*issāsasippa*）については及ぶべきものがないようになって帰ってきた。父王の死によって王位を継ぐように求められたが《即位関連》、弟のブラフマダッタ王子に譲った。その後、謀叛の讒言により国を去った。

〈7〉 ブラフマダッタ・クマーラ（*Brahmadattakumāra*）（菩薩）/男/クシャトリヤ

(王子) /16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《即位》

Jātaka 252 Tīlamuṭṭhi-j. (vol. II p.277) : [主分] 昔の王等は城下に名高い師匠がいても、王子等の尊大さを抑制し、寒暑に耐え、世の道に通曉させるために遠い外国に派遣することにしていた。ブラフマダッタ王にはブラフマダッタ王子という息子があつた。彼が 16 歳 (soḷasavassa) になった時、一枚底の履物 (ekatalikaupāhanā) と草製の日傘 (paṇṇacchatta) と [謝礼のための] 千カハーパナ (kahāpaṇasahassa) のお金を与えて、学芸 (sippa) を修めさせるためにタッカシラーへ行かせた《遊学》。教えのための住み込み弟子 (dhammantevāsika 南伝; 隨身生) というのは昼間は師匠の仕事をし、夜分、学芸を修得する。師匠に謝礼を出した者 (ācariyabhāgadāyaka) はその家において、長男 (jeṭṭhaputta) のようになって、学芸を修得する。それゆえその師匠もまた日夜穏やかに王子に学芸を教えた。……王子は学芸を完成して (sippaṃ niṭṭhāpetvā) 《学業の修了》、バーラーナシーに帰った。王は「生きていたので、息子を見られた。生きている間に彼が王たることの栄光を見よう」と言って (jīvamānena me putto diṭṭho, jīvamāno c' assa rajjasiriṃ passissāmi ti)、息子を王位につけた (puttaṃ rajje patiṭṭhāpesi) 《即位》。

(8) (バーラーナシー王の息子) /男/クシャトリヤ (王子) /16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《副王》⇒④ (父王の死後) 《即位》

Jātaka 338 Thusa-j. (vol. III p.122) : [主分] 菩薩はタッカシラーで四方に名高い師匠として多くの王子や婆羅門の子等とに学芸を授けていた。バーラーナシー王の息子も 16 歳 (soḷasavassa) の頃、菩薩のもとに行つて 3 ヴェーダとあらゆる学芸 (tayo vede sabbasippāni) とを修め《遊学》、学成りて後 (uggaṇhitvā paripuṇṇasippo) 《学業の修了》、国に帰り、副王の位に即き《副王》、父王の死後は王位に即いた《即位》。その子が 16 歳 (soḷasavassa) になる時、父の堂々たる姿を見て、王位を奪いたいと侍者に告げた。

(9) ブラフマダッタ・クマラー (Brahmadattakumāra) (菩薩) /男/クシャトリヤ (王子) /16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《即位》⇒④ (即位より 50 年後) 《隠棲》

Jātaka 378 Darimukha-j. (vol. III p.238) : [主分] 菩薩はマガダ王の第 1 妃の胎に生まれ、ブラフマダッタ王子と呼ばれた。同じ日に王の司祭の子も生まれ、ダリームカと名づけられた。彼らは 16 歳 (soḷasavassa) の時にタッカシラーへ行つてあらゆる学芸を学んだ (sabbasippāni uggaṇhitvā) 《遊学》。さらに国々の風俗習慣も学びたいと考え、村や町を行乞して巡ってバーラーナシーに着いた。それはバーラーナシー王が死んでから 7 日目であつた。司祭官は菩薩の足に吉祥の相があるのを見て、灌頂して、後継ぎのいないこの国の王とした《即位》。友のダリームカは出家してヒマラヤ山中へ飛び去った。菩薩は栄誉の偉大さにダリームカのことを忘れていたが、40 年目に思い出した。そして 50 年が過ぎたとき、ダリームカも菩薩を思い出した。「いまや彼は歳をとり、息子や娘も大きくなった。

正しい道を説いて出家させよう (idāni so mahallako puttadhītādīhi vuddhippatto, gantvā dhammaṃ kathetvā pabbājessāmi tan) 」と考えて、菩薩と再会した。菩薩は長子に王位を取らせ、出家《隠棲》した。

〈10〉 ダリームカ (Darīmukha) /男/バラモン (司祭官の息子) /16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《隠棲》

Jātaka 378 Darīmukha-j. (vol.III p.238) : [主分] 上記、王の司祭の家のブラフマダッタ・クマーラと同日生れの子。彼らは 16 歳 (soḷasavassa) の時にタッカシラーへ行ってあらゆる学芸を学んだ《遊学》。さらに国々の風俗習慣も学びたいと考え、村や町を行乞して巡ってバーラーナシーに着いた。ダリームカはその後ヒマラヤ山中に隠棲した《隠棲》。

〈11〉 カンハ・クマーラ (Kaṇhakumāra) (菩薩) /男/バラモン/16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《結婚》

Jātaka 440 Kaṇha-j. (vol.IV p.006) : [主分] 菩薩は 8 億の財産を有する婆羅門の妻の胎に生まれ、カンハ童子と名づけられた。16 歳 (soḷasavassa) の時、父親に遣わされてタッカシラーであらゆる学芸を修して帰って来た (sabbasippāni uggahetvā paccāgañchi) 《遊学/学業の修了》。それから父は彼に相応しい娘を娶らせ《結婚》、その後、父母が亡くなると、あらゆる主権を継承した。

〈12〉 アキッティ (Akitti) (菩薩) /男/バラモン/16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③ (両親の死後) 《隠棲》

Jātaka 480 Akitti-j. (vol.IV p.236) : [主分] 菩薩は 80 コーティも財産を所有する婆羅門の富豪の家に生まれ、アキッティと名づけられた。彼が立って歩けるようになった時、妹が生まれ、ヤサヴァティー (Yasavati) と名づけられた。菩薩は 16 歳 (soḷasavassa) になると、タッカシラーへ行って勉強し、あらゆる学芸を学び終えて帰って来た (sabbasippāni uggāṇhitvā paccāgamāsi) 《遊学/学業の修了》。彼の両親はまもなく他界し、妹と共に出家した《隠棲》。

〈13〉 ジョーティパーラ (Jotipāla) (菩薩) /男/バラモン/16 歳

① 16 歳《遊学》⇒② 16 歳 (7 日後) 《学業の修了》⇒③ 16 歳《就業》

Jātaka 522 Sarabhaṅga-j. (vol.V p.127) : [主分] ジョーティパーラは成長して (vaḍḍamāna) 16 歳 (soḷasavassa) になると、この上もない容姿をしていた。それを見て、父は息子にタッカシラーへ行って四方に名高い師匠のもとで学芸を修めるように言った。彼は千金を出して学芸を教わったが、7 日目にして奥義に達した《遊学/学業の修了》。師匠は老いたことを理由に 500 人の青年バラモンを彼に託した (sippaṃ paṭṭhāpetvā satthāhen' eva nipphattiṃ pāpuṇi) 《就業①》。菩薩はすべてを引き受け、バーラーナシーに戻ると、毎日千金をもらって王に仕えた《就業②》。

〈14〉 シヴィ・クマーラ (Sivikumāra) /男/クシャトリヤ (王子) /16 歳

① 16 歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《即位》

Jātaka 527 Ummadanti-j. (vol.V p.210) : [主分] シヴィ王子 (菩薩) と王の將軍の子であるアヒパーラカは、ともに 16 歳 (soḷasavassika) の時、タッカシラー

へ行って学芸を習って帰った (*sippaṃ uggaṇhitvā āgamiṃsu*) 《遊学/学業の修了》。父王はシヴィ王子に位を譲り《即位》、新王はアヒパーラカを將軍の職につけた。

〈15〉アヒパーラカ (*Ahipāraka*) /男/クシャトリヤ (將軍の子) /16歳

① 16歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《就業》

Jātaka 527 Ummadanti-j. (vol.V p.210) : シヴィ王子 (菩薩) と王の將軍の子であるアヒパーラカは、ともに16歳 (*soḷasavassika*) の時、タッカシラーへ行って学芸を習って帰った《遊学》。父王はシヴィ王子に位を譲り、新王はアヒパーラカを將軍の職につけた《就業》。

〈16〉一梵志/男/バラモン/20歳

① 20歳《学業の修了》⇒② 20歳《遊学》⇒③《比丘》

『法句譬喻經』 (大正04 p.587上) : 昔有梵志其年二十。天才自然事無大小過日則能。自以聰哲而自誓曰。天下技術要當盡知。一藝不通則非明達也。於是遊學無師不造《遊学》。六藝雜術天文地理。醫方鎮壓山崩地動。擣搗博奕妓樂博撮。裁割衣裳文繡綾綺。厨膳切割調和滋味。人間之事無不兼達。……盡心受學月日之中。具解弓法所作巧妙乃踰於師。……月日之中知其逆順。御船迴旋乃踰於師。……月日之間具解尺寸方圓規知。彫文刻鏤木事盡知。天才明朗事輒勝師。……佛言沙門善來鬚髮自墮即成沙門《比丘》。佛重爲說四諦八解之要。尋時即得阿羅漢道⁽¹⁾。

(1) 上記の外に次のような資料も存する。ただし同列には扱えないので参考として掲げる。

舍利弗/男/バラモン/16歳

『中本起經』 (大正04 p.153下) : 吾小好學。八歳從師。至年十六。古仙道術。靡書不綜。十六大國。謂吾廣博。未曾聞斯眞要之義。今偶出遊。遇此寶藏。

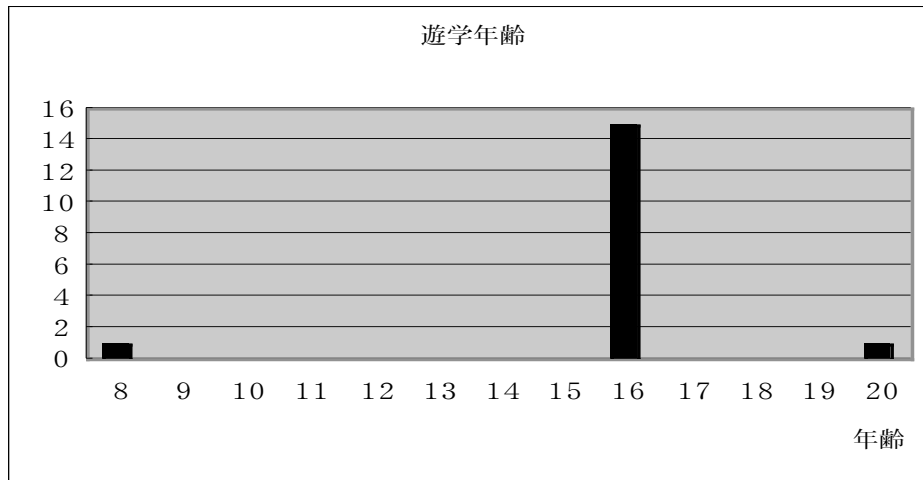
[2] 上記のように、遊学記事はパターン化しているから、統計的処理をする必要も感じられないが、今までと同様の作業を行っておく。

[2-1] 遊学年齢のA文献・B文献資料を度数分布表にしてみると以下のようになる。

《遊学年齢》

年齢	A. 原始仏典				B. 後期仏典				総計
	パーリ		漢訳		<i>Jātaka, Apadāna</i>		本縁部・根本有部律		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
8			1						1
16					15				15
20							1		1
平均									15.8
最頻値									16
総計			1		15		1		17

[2-2] 上記の表をヒストグラムで表すと次のようになる。



[2-3] A文献（1件）、B文献（16件）を合わせた学業の修了年齢の最頻値は16歳（度数15〔相対度数88.24〕）となっている。A文献は8歳でとった1件のみ、B文献の最頻値は16歳（度数15〔相対度数93.75〕）である。平均を強いて出せば、B文献の平均は16.3歳、A文献・B文献を合わせた平均は15.8歳である。

[3] 上記に基づいて若干の考察を施しておく。

[3-1] A文献は1例のみであり、瑠璃王子はコーサラ国王波斯匿の王子であるが、特別な因縁のあったカピラヴァットゥのマハーナーマのところに遊学したというのであるから、特殊ケースとして無視してよいであろう。

[3-2] B文献はそのほとんどがジャータカであって、しかもパターン化され、16歳の時に、学芸を学ぶために、タッカシラーに遊学したとされている。

これについて、山崎元一博士は、『古代インドの王権と宗教』（刀水書房 1994年 p.199）において、「前記の分類表から知られるように、ジャータカに登場しその生涯がある程度判明する王のうちの過半数が、王子時代にタクシラに遊学している。物語中で特にそれとは言及されないが、遊学の可能性のある王も多い。そこで問題になるのは、こうした話が現実をどの程度物語っているかということであるが、個々の記事に当たってみると、ジャータカの常套句とみられるものが多い。話の内容から、物語編者が王に対して抱く理想の一端を窺い知ることができるが、常識的に言って、現実の王の多くが青年期にこうした遠国での遊学生活を送ったとは考えにくい。禁欲的修学を一六歳までとする『実利論』の記事の方が、現実をより反映しているとみてよかろう」とされる。もっともなご意見であろう。

また中村元博士は『原始仏教の成立』中村元選集〔決定版〕第14巻（春秋社 1992年11月）「〔付編〕原始仏教聖典成立史研究の基準について」（p.657）において、「西北インドのタクシャシラーの大学ヘバラモンや資産者（gahapati）の子弟が技芸を習いに行くという記事が仏典の散文の部分のうちに盛んに現われる。ところがこのことがガーターの部分には現われない。もしもインド全体の統一ができて、立派な交通路が設定されているのであれば、ベナレスのあたりからタクシャシラーのような遠いところへ修学に行くことは困難であり、また父兄も子弟を送らなかつたであろう。また遊学の謝礼金として貨幣をもって行

くのであるが、ある程度まで通貨の流通が円満に行なわれているのでなければ、このようなことは無意義である。またわざわざ西北インドまで遊学するのは、当地の大学の西方のギリシアやペルシアの技術を摂取していたからにほかならない。ゆえにタクシャシラー大学への遊学を説く『ジャータカ』の散文などはマウリヤ王朝時代、あるいはそれ以後のものである」とされる。

ただし具体的な年齢が示されていないので、本資料では扱っていないが、A文献に **Jivaka-Komārabhacca** が分別を得た (*viññūtaṃ pāpuṇi*) ときに、タッカシラーに行き、7年間医術を学んだとする記事が見いだされ⁽¹⁾、この記事はむげに否定することはできないように思われる。中村博士が「インド全体の統一ができて、立派な交通路が設定されているのでなければ」、遠い西北インドまで遊学できないとすれば、釈尊や仏弟子たちが盛んに行った遠方までの遊行まで否定しなければならないことになる。確かに山崎博士の言われるように、王の多くがその若いときに、遠いタッカシラーまで遊学したとは信じられないが、しかしまったく考えられなかったわけではないとしなければならないであろう。

したがって、むしろこの16歳の遊学は、基礎的な学業の修了が16歳であったことを裏付けるものとするにとどめた方がよいかも知れない。

(1) *Vinaya Cīvarakkhandhaka* (vol. I p.269)、『四分律』「衣撻度」(大正22 p.851上)、および【資料集1-2】p.205参照。